

軍参謀は師団に停戦命令を伝え第百七師団は矛を収めた。

満州・中支と転戦

鉄道第三連隊

秋田県 熊谷繁雄

私は大正十一年二月、九人兄弟姉妹の次男として秋田県仙北郡の鍛冶屋の家に生まれた。働き手は父、叔父、兄、私の四人で、鋸の製造が専門で、その他、山仕事に使用する諸道具から鋏・鎌等の農具、家庭金物類の販売もする何でも屋であった。

昭和十六年五月二十二日、皇紀二千六百年と青年訓練実施十五周年記念の年とのことで、全国青年学校生徒の御親閲に参加したことは大きな思い出である。私私が豊川村より代表者として天皇陛下の御前を分列行進したのである。全国より約三万五千人の勤労青年が、宮城二重橋前に参集しての一大行事であった。

昭和十七年六月、私の母校である角館町小学校で徴兵検査を受けた。簡単な学科試験と身体検査を受け、徴兵官の中佐殿の前に進み「甲種合格」と言われた第一号であった。しばらくして役場の兵事係が来られ、秋田連隊区よりの籤だと言って一本の「紙より」を渡された。それには「鉄道兵一番、在外部隊」とあった。その夜の夕食の時に兄が、「俺と同じ部隊かも知れぬ」と言った。兄は昭和十三年徴集（大正七年生まれ）で、旧満州国ハルピンの鉄道第三連隊で、ソ満国境の満洲里で三年間勤務し、昭和十六年の暮れか十七年の初め頃満期除隊をした。

昭和十八年一月十日、千葉市の鉄道第一連隊（東部第八十六部隊）に関東軍要員として入隊し、材料廠中隊（特科隊）に配属であった。教官は松田中尉、助教南雲軍曹、上田伍長が内地の集合教育係と初年兵受領者を兼ねておられた。上田伍長は満州ハルピンの鉄道第三連隊より来られたそうである。

初年兵約六十人が二個班に分かれての集合教育が行

われた。班長上田伍長、助手は鉄道第一連隊補充隊より三人の一等兵であった。初年兵同士も全くの初対面、後で解ったことだが北海道、東北六県と新潟県からの人達だった。初めに軍隊生活の一応の説明があつて、夕食からは厳しい内務班の生活が始まつた。我々初年兵はただうろするばかり、時々ビンタが飛んでくる。軍事教練、作業訓練と無我夢中のうちに二月が過ぎ、一期の検閲らしきものを、まあまあ成績だったやうで終了した。

三月十九日、初年兵五百数十人は完全軍装で白布を巻いた小銃を手に一路満州ハルビンへと出発した。鉄道第三連隊に到着し、三月下旬というのに外は零下一〇度以下とかだが室内は春そのものであった。材料廠第四班の兵舎は千葉の木造兵舎とは異なり赤煉瓦で築かれた立派な建物であり驚いた。

第四班の班長は我々を受領に来られた南雲軍曹、班付下士官はこれも上田伍長であつたが、寝台の右には三年兵の下士官勤務の兵長、左には予備役の兵長、二階の真上は一等兵の補充兵を戦友と呼び、身の回りの

世話をするようにと二年兵の戦友が話してくれた。

初年兵九人に古参兵三十数人の内務班だったが、先輩の顔は鍾馗のように見えてならなかった。二年兵の教育係から「これから一年間は馬鹿になれ、必ず道が開ける」と言われた。無我夢中で外での演習訓練、内務での食事当番、洗濯、掃除、銃器の手入れ等、目の回る忙しさは内地とは数段の違いであつた。

五月下旬一期の検閲を無事終了、一等兵となり二期の特業教育になる。私は重鍛工部に編入される。外での軍事教練でなく工場内での特業、私は鍛冶屋だったので案内案であつた。軍属の工員と古参兵、現地人十数人が働いていた。勿論初年兵は別教育であつたけれども、十月近くなつたある日、下士官室に数人呼ばれて下士官志願せよとのことだった。次男、三男の人達五人は消灯後、それに備えて特訓が始まつた。やがて試験に合格し、十一月末日千葉県津田沼の鉄道練習部（東部第九十一部隊）に配属となつた。

全鉄道連隊百数人の集合教育、ここでは心身共に練り鍛えられた。下士官候補生最後の訓練は百キロ行軍

であった。朝、昼、夕食の時間は三十分、それ以外は休みなしで与えられた行動をする。明け方東の空が白みかける頃、道路端の側溝に落ちる者は走りながら眠っているのだ。いろいろ苦難を乗り越えてどうにか教育隊も終了し、上等兵となり一時帰京を許可され、「最後になるかもしれない別れをして来い」とのことであった。

昭和十九年四月二十九日より三日間の休暇だった。両親、兄弟が大変喜んでくれた。酒も煙草も少しは飲めるようになった。

五月三日、ハルビン原隊鉄道第三連隊に復帰する。鉄三の下士官候補者三十数人、原隊は留守隊数人で、先輩・同年兵は転属または北支へ、本隊は中支へ三月頃より移動した由で、本隊へ追及せよとのことであった。二、三日休養し一行はまた列車の人となった。

北支を通過、揚子江北岸の浦口で若干の人達、そして南京で数人と別れた。揚子江は夜間だけの航行となる。武昌到着は五月十五日だった。早速隊長以下幹部の方々に申告した。今までの演習が今度は実戦に生か

される時が来た。五人の下士官候補も武昌到着後は各々の任務に分散し、めったに顔を会わせる機会などなかった。

六月初旬前進命令が出た。いよいよ湘桂作戦の発動である。空襲が頻繁にあるから列車運行は夜間のみ、昼間は軌道の整備、前線への輸送品の積載、材料廠長は宮野少佐（後に中佐）、兵舎隊長は五味大尉、指揮班長東海林中尉、私は田所主計中尉の配下で「金庫衛兵」を命ぜられ、司令・浅野軍曹以下、下士官・兵五人、及び現地人二人であった。この金庫の中には現金と書類が満杯で、その行李二個を運搬する役目であった。

この頃の鉄三の主力は湘桂鉄道の占領で、目標は衡陽の占領にあったようだ。荷物が重く苦力も歩けないという。仕方なく私達で交代しながら歩くが本隊より大分遅れてしまった。黒牛の背中の世話になったが三日と続かなかつた。鉄道は破壊されて応急修理に手間取りどうにもならぬ。休みなしの強行軍で本隊に追い付こうとしても、中国は雨期で思うように歩けない。

このような日の連続でようやく株洲でどうか本隊に
追い付いたが、私はマラリア熱に罹って苦しんだ。

これから先は状況が悪く（敵・雨期・悪路など）今
までの数倍の苦勞することは間違いない。下痢患者が
出て落伍する兵が出たが交代の兵員はない。やむな
く、兵器、弾薬、食糧以外は全部株洲に置き、後送を
依頼してまた行軍を開始した。その時私は、写真や私
物、家族への手紙（遺書）、遺髪、遺爪などを置いて
行ったが、後に聞くと、ほとんど通過部隊は携行品を
預けて行ったそうである。しかし、倉庫というべき幕
舎は爆弾により全部無くなったそうである。

我々はその後も山を越え谷を渡り、食糧も欠乏して
きたので、芋畑で土中を掘り十個ばかりの芋を雑のう
に入れ持って帰ったが、種芋であったので大根より不
味であり腹の足しにならなかった。山越えで友軍の野
戦重砲兵を追い越す場面があったが、体格の見事な軍
馬が泥路で進むことが出来ず、疲勞と食糧難、暑さに
耐えかね四つ足を上にして倒れていた。見るに見兼ね
たが、私達ではどうすることも出来ず、唯々「ご苦勞

様」と励まし合いながら別れたが、あの兵や馬達はど
うなったかと今でも思い出すことがある。

約一カ月半にわたる行軍は悪路と食糧難、そして銃
爆撃の合間の行軍だ。一時も早く本隊に追い付かねば
と心が早まるが思うようにならない。ようやく本隊の
後尾らしき所まで追い付いたと思ったら今度は苦力の
一人が歩行困難と言う。兵隊も苦力も皆同じ仲間であ
る。「目的地の衡陽まであと少しだから頑張れ」と励
ましたらどうにか歩くことが出来た。しかし、衡陽ま
でどれくらい距離なのか誰にもわからない。

空爆の合間を見ての真昼間の行軍が続いたある日、
どうしても水が飲みたいが民家も無い、谷川も無い、
しばらくすると窪地の泥水があったので一口手で掬っ
て飲んだが少し赤味がある。一緒の同年兵が「おいそ
の泥水飲むな」と言うので指差した方向を見ると軍馬
が二、三頭倒れている。赤味の水とは軍馬の血であっ
た。それでも九死に一生を得た思いで口にしたおかげ
で、また行軍を続けることができたし、幸いに病気に
もならず目的地衡陽まで到着出来たことを幸いに思っ

た。

衡陽総攻撃後一週間ぐらいの時、飛行場のそばを流れる湘江の対岸で仮材料廠本部としての生活が始まった。衡陽の市街地の建物はほとんど破壊され、中国兵の死体のごろごろ転がっている。戦争の激烈さと悲惨が身に染みる思いであった。その後、中国人捕虜（先和兵と言う）数十人が来てその監視も一つの任務となった。ほとんど兵で、曹長と呼ばれる者が二、三人だった。仮兵舎での日夕点呼は我々と同じで、仲良く生活出来たと思う。また武昌から約二カ月間行動を共にして来た苦力も先和兵の仲間入りしたが意見が合わないらしく、私達の所へ来て作業の手助けをしてくれた。このように、日・中同種同文ということで仲良く協力し合っていた。

昭和十九年の暮れと翌年二月、内地から補充兵が来たので我々は更に前線へ前線へと食糧・器材機器を運搬するが、敵機の空襲は激しさを増し、ゲリラの侵入も盛んになり、戦況もますます厳しくなって、桂林方面に進撃していた我が分遣隊の一部も後退するように

なった。

六月も終わりに近付いた頃、先和兵の上司ばかり数人が真夜中、監視兵の銃を奪い逃走したとのことで捜索隊を出したが発見逮捕することが出来ず、先和兵收容所長の見習士官が責任を感じて、拳銃で頭部を撃つて自決した悲しい事件もあった。この人は奈良県出身の未来ある将校であったが、後日聞いた話では一人息子ということであった。

その後、宮野中佐が関東軍に転属し、参謀肩章をつけた藤田少佐が後任となり、分遣隊の交代や負傷兵、マラリアや風土病に加えて食糧難による栄養失調などで、落伍、後送、入院する者が多くなってきた。我々下士官には日本軍の戦況などあまり解らなかったが、ただただ、与えられた任務を確実に実行するだけだった。

やがて、昭和二十年八月十五日頃と思うが、全員集合の命令があった。お昼時、そのままの服装でこのことだったので、「何事か」と思いながら本部要員数十人集合した。部隊長からは発言が一言もなく、頭を下

げてうなだれておる様子である。程なく先任將校が「戦況が悪く降伏したようだ」とのこと。隊長殿が「次の命令があるまで、各自の勤務場所を待機せよ、勝手な行動をしてはならない。解散」ということであった。

自分の室に戻り、同年兵数人で話し合ったが、最初は安易な気持ちでいたが、真相は「無条件降伏」ということであった。負け戦の経験がないだけ、今後どうなるのか、皆不安でいっぱいであった。

先和兵は大手を振って兵舎を出て行った。何やら大声で叫びながら日本兵をののしり、笑っているようだった。岳州以来約一年二カ月行動を共にしてきた苦力の二人も出て行ったが「シーさん（先生）謝々」と言っただけで涙さへ浮かべているようだ。一人は四十代の後半か、一人は二十代の若者だった。いまだ復興していない衡陽の街の方へと、姿が見えなくなるまで見送っていたことを思い出す。

機密になる物は焼却すること。身近な食糧、武器弾薬を確保する。奥地にこもるとか、我々は鉄三の原隊

ハルビンに帰るのだとか、日本兵はある所に集められ皆殺しにされるとか、色々のデマがあった。後に、やや平常に戻ってきて、湘桂沿線に分散していた鉄三連隊各隊の兵隊達も集結地の武昌まで後退することになった。今度は行軍ではなく、百式牽引車で、未完成な橋梁等は補修しながらの集結であった。

私達は武装解除はしていなかったので、中国軍と一緒に武昌入りし、漢口の収容所に着いたのが九月中旬であったように思う。武装解除となり階級章も取り丸腰となった。特にやることはなく、また北支の方が物価が安いからというので軽列車で買い出しに行く程度である。また、中国兵の衛兵所には我が軍の兵器を持った監視兵が数人いた。その隣には私達の衛兵所があり、衛兵勤務には私達のような新参の下士官と古参の上等兵・兵長がその任にあった。

昨日の敵は今日の友とばかり、衛兵所勤務の日支同士が仲良くなり、近くの街へ出掛けたことを思い出す。また、中国軍に参加しないかと何度も誘いを受けた。二階級の特進または將校にしてやるとか。しか

し、それには応ずる者として無く、いつの日か判らぬが日本の土を踏みしめるまでの仲と思っていた。しかし、あの中国兵は我々に親切にしてくれた。全く感謝に堪えない次第である。例えば電気の無い仮宿舎にも発電機を運転し各宿舎に電気をつける。枕木の製材には大きな発電機を設置して製材をする。木工部（大工班）の方は仮宿舎を建てる。列車、軌道車は申すに及ばず、兵隊とは思われぬ技術者の部隊だったと思われる。

糧秣受領や衛兵などの勤務のない時は、リュックサックを作るのが日課となった時もあった。革具を見付けてくる者、金具や紐を見付けてくる者など、それぞれの特技(?)を生かしての収容所生活を楽しんだものである。戦友の中には器用な者、絵の上手な者もいて、トランプ、花札、将棋など作る者もいて徒然の慰めとしたり、望郷の苦を忘れさせてくれたものであった。

待ちに待った内地帰還となり、鉄三連隊は北支を経

由して南京へと列車の旅であった。途中何かの障害のため数時間停車することもあり、その都度、万年筆や時計などを進呈してようやく発車することもあった。

南京―上海間の列車でも、私物検査とやらで教時間の待ち伏せにあり、中国兵の護衛員が同乗していたが何の役にもたらず、むしろ物品をねだる有様であった。しかし、敗戦国の兵士はどうすることも出来ず、ただただ一日も早く帰還を願いつつ、我慢に我慢を重ねてようやく上海に到着した。

最終の検査には緊張したがこれも無事通過した。大隊長以上は戦犯容疑者として残り、材料廠長藤田少佐が輸送指揮官となり、三日間の船旅でようやく佐世保港に到着したが、船酔いのため半数以上が食事も出来ず青ざめての帰国であった。

六月二十四日、付近の小学校体育館で解散式が行われ三年七カ月の長い軍隊生活に終止符を打った次第である。

私の家では、長兄は昭和十三年徴集兵で鉄道第三連隊入営現役満期除隊後、昭和十九年再召集。ビルマ戦

線に征き帰還、次男の私は今申した兵役である。三男は海軍志願し各地航空隊に配属、九州より復員。四男は秋田工業学校卒、日満技工所で一年間教育を受け渡満、ソ連参戦を知り逃亡を続け在留邦人の中にもぐり込み、昭和二十一年八月、別人のような姿でようやく我が家に辿り着いたことである。

この様に四人の男児が無事帰還出来たことは奇跡であり、両親の喜びは察するに余りあるものであった。しかし、従軍中各地の戦場で戦没された方及びその御家族のお気持ちを思う時、ただ喜んではいられぬ、心より戦没者の御冥福を祈るものである。

敗戦の日々

山形県 舟山 敏雄

私は山形県西置賜郡飯豊村の農家の八人兄弟の次男として生まれました。学校を卒業して農業の手伝いをしばらくやり、昭和十七年一月から立川市曙町の陸軍

獣医資材廠の輸送課に入隊するまで勤めていました。昭和十七年の暮れ、現役入隊のため一旦帰郷、昭和十八年の一月に徴兵検査を受け甲種合格、山形県十六番衛生兵と告げられました。

検査でつくづく感じられました。禿もない体での精密検査で、尻の穴の奥まで検査、一物を握られ膿が出ないかしごかれての検査。精兵になる前提なのでしようが、一面破廉恥な兵が生ずる温床にもなります。

初年兵教育は満州でした。一月十六日に広島練兵場に集合させられ、一路満州国ハルビンまで連れていかれました。独立歩兵第一七四部隊に入隊し、星一つの新兵教育が始まりました。「お前たちは一銭五厘の葉書でいくらでも集まるのだ」という言葉と理不尽なビシタに泣いたことは今でも忘れられません。

戦闘訓練も終了し、一期の検閲が済んだら星二つの一等兵になり、市内の第一一四部隊に転属になりました。

その部隊は満州国の一等病院、皇族や関東軍司令官も入院する立派な病院で、陸軍看護婦と赤十字看護婦